ゲーテの宗教敍事詩

臼井竹次郎

永遠のユダヤ人またはさまよへるユダヤ人についての傳説は、その起源は聖書の言葉によるとされてゐる。「誠に爾曹に告ん人の子其國を以て來るを見までは此に立ものの中に死ざる者あるべし」（マタイ傳十六章二八節）などの箇所がそれであるとして、この傳説が形造られたのは一体いつの頃であらうか。芥川龍之介はこれに興味を持つたらしく、よく調べて居るが、アハスヴェルスの姿を見たと云ふ記録は十三世紀以後らしい。そして十六世紀頃から十八世紀にかけてヨーロッパの隨所に現はれたと云ふ記録があるさうである。それが何に關聯するかはわからないが、このユダヤ人についての話が活潑になった頃が丁度ファウストの傳説が盛んになった頃に當るらしいことはわかる。ドイツで最初にこのユダヤ人に關する繪双紙本が出たのが一六〇二年、「アハスヴェルスと言ふ名をもてるユダヤ人についての物語のあらまし」と云ふ題であった。ファウスト傳説の最初の繪双紙本は一五八七年。いづれも信仰なきものの姿であるが、これらの傳説が喜ばれたのは諸國遍歷の話やら世の常ならぬ奇行などの面白味によるのかも知れない。一方は未來に向はうとする新しい人間、他は過去を脊負うた人間として登場するのも興味あることである。ともかくどちらの繪双紙本もゲーテが幼い頃愛讀したものであり、共に早くからこれを作品として書きたいと志した題材であった。

ゲーテが永遠のユダヤ人の傳説をとり上げて敍事詩の形にしようとした時、宗教敍事詩としてはすでにミルトンの大作があり、これがボードマー一派によって文學の至寶と仰がれてゐた。そしてクロップシュトクはドイツの宗教敍事詩としてメシアスを書いた。一七四八年、二十四歳の時に書き始め、一七七三年にこれを完結した。そしてゲーテがアハスヴェルスの敍事詩を書きかけたのが丁度メシアスの完結の年で、ゲーテは時に二十四歳であった。青年ゲーテがクロップシュトクの抒情詩に感激を寄せたことはウェルテルの中にその記念の文字を殘してゐるが、その敍事詩が正統派の信仰を出でず、生彩を缺く所あるには慊らなかったことでもあったのであらう。ゲーテは宗教敍事詩に諷刺的なパロディの姿を與へたのである。

後年一八一三年に「詩と眞實」の第十五巻で當時を回想した所を見ると、ゲーテはこの傳説を敍事詩として取扱ひ宗教史、教會史の中で目立った事件を拾って描かうとした一大長篇を企ててゐたことを述べ、アハスヴェルスについては彼がドレスデン滯在中に知合つた靴屋をモデルにし、これに同業仲間としてハンス・ザックスの機智を加へて、この傳説の人物を描くつもりであったと云ふ。

大體の構想は次の通りである。口が達者で輕口の名人なので、この靴屋の仕事場は通行人も立止ってなかなかの賑はひ。キリストも弟子に連れられて折々はここに立寄ることもあった。靴屋はキリストが贔屓なのであるが、强引に自分の考へ通りのキリストでなければならないときめてかかる頭の固さ。靴屋はキリストに向って、閑人連と一緒にぶらついて、仕事を放たらかさせて人を集めたりなどすればろくなことにはならない、人が集まれば謀反にもなりかねないし、その頭目にでもかつがれてつまらぬ目を見るは必定だから、遊説は止めたがいいと説きつける。キリストは得意の譬へ話でわけを説明するが、そんな言葉は靴屋の耳に入らない。する中にキリストの名が高くなる。やがて捕へられ、裁かれ、判決をうける。その時ユダがこの仕事場に駈けこんで來た。ユダは他のキリストの味方と同じくキリストが私は王だと名乘りを上げてくれるのを今か今かと待ってゐたが、いつまでも煮え切らずにぐづついてゐる

キリストに齒がゆくなって、今は無理にでもこれを實行させようとて、今まで力を用ひることをさしひかへてゐた祭司團をそそのかしたのである。勿論いざとなれば血の雨も辞せぬだけの用意はしてあったのに、キリストは意外にも自分の方から進んで己が身を引渡し、弟子どもを悲嘆のどん底につき落してしまった、とユダの述懐。靴屋はこれを聞いてもキリストへの腹立ちはおさまらず、またユダに對しても要らざることを、とこれまた八つ當り。そこでユダはとりつく島なく、急いで飛出して首を吊るよりほかはなかった。

ゴルゴタへの道すがら、靴屋の仕事場の前にさしかかった時、十字架の重さに耐へかねたキリストを見てアハスヴェルスは、あれ程言っておいたのに聞かなかったからだと責め立てた。彼は正義漢ではあるが、憫みを知らず、人が己が罪で不幸な目に遭ふと、これを一層責め立てて不幸を更に大きくする人間なのである。この時ヴェロニカはキリストの顔を布で蔽ひ、これをまたとると、受難の相は一變して變容に光り輝く顔が見えた。その光がまぶしくて目を閉ぢると、「お前は私がこの姿でゐるのを再び見るまでは地上をさまよふのだ」との聲が靴屋の耳に聞えた。びっくり仰天して目を開けると、みんなは出かけて行った後でエルサレムの通りはひっそり閑。不安と憧憬に駆られて家を飛び出したのがアハスヴェルスのさすらひの始まり。

この腹案が果して青年時代にすでにこのままのものとしてあったのか、或は後の人生觀からつけ加はったものがあるのかはわからない。ともあれゲーテはこの腹案で書き出したけれども、これに必要な調べものをしなければならずその時間もなければ、他の計劃もあってこれに力を集中することもできず、その中にウェルテルを書き、その反響以後は「永遠のユダヤ人」を書きつづけることができなくなったと述べてゐる。斷片として殘ってゐる敍事詩に出て來るアハスヴェルスはごく僅かだけだから、「詩と眞實」にある腹案はこれだけではうかがふべくもないが、例へばユダの人物についての解釋は後年の考へではないだらうかと思はれる。またハンス・ザックスばりのユーモアを持たせることも後からの考へ方だったかも知れない。

この敍事詩についての最初の記録はラーファターの日記で、一七七四年六月二八日の所に、ゲーテと同車して行く途中、彼がスピノザについて語り、この人ほど神、救世主について語った人はないと言ってから、「永遠のユダヤ人」から引用して聞かせたとある。恐らくこの場合の引用箇所はこの敍事詩の第二の構想たる再來のキリストに關する部分であっただらうと思はれる。

この敍事詩は「詩と眞實」では「プロメートイス」とならんで觸れてあるので、一七七三年の作と見ることができる。この敍事詩斷片は中絶のままになったが、ゲーテはこれを幾度かとり上げて書きつづけることを考へてゐたやうである。それから十三年後、一七八六年十月二八日、ローマに向ふ街道で Quo vadis Domine の扁額のかかってゐる教會堂の前に立った時、ペトロに與へたキリストの答、再び十字架にかからんがために來たとの言葉が浮んで來て、ミューズの神は一つのよき着想を與へてくれたと日記に記されてゐる。だが更に書き加へられることはなかった。更に「詩と眞實」第十六巻によれば永遠のユダヤ人は遍歷の途すがらスピノザを訪れることが考へられてゐたやうである。キリストに再會する前のことであるに違ひないから、或はアハスヴェルスの救ひのことが考へられてゐたのであらうか。このやうにいろいろと腹案が追加されて書きつづける意志はあったやうであるが、ファウストとは違ってきれぎれの斷片のままに終った。これが發表されたのは死後四年のこと、一八三六年の全集にリーマーとエッカーマンによって入れられた。テキストは版によって若干の差異がある。

先づ作者は眞夜中に飛び起きて書き出したと冒頭に前置きして、書かずに居れない欲求は書かなければならない義務だと云った、烈しく急きこんだ調子で始まるのである。ゲーテはライプチヒで病を獲た後、ヘルンフート派に接近したが、宗教哲學、教會史の研究を進めて行くにつれ、一七七二年頃にはピエティストからも離れ、あらゆるドグマをもたない宗教としてのキリスト教、彼の言葉を借りると「私用のキリスト教」を見出すに到ったのである。キリストの人格への敬愛、聖書への關心が高まるにつれて、一つの宗派に偏するものの持つ頭の中のしこりから離れてこれ

に對する諷刺に傾き、アハスヴェルスに於てこれの對象を見出したのである。また他方では教會の歴史を研究して行って、教會がキリストの教へからどれだけ離れたものとなってしまったかをいよいよ知るに及んで、それに對する諷刺の欲求も强くなって來たのである。ここに彼の企てた敍事詩が先人の宗教敍事詩から離れて行った分岐點がある。ミルトンの向ふを張って正面切つたクロップシュトクの敍事詩はそのために固くなったと評されたが、若い詩人は諷刺的パロディの中で行動の自由を見出さうとしたのであらう。

この頃、即ち一七七三年に「牧師の手紙」が書かれた。これは一人の老牧師が新任の牧師に自分の考へてゐる所を述べたもので、フランス語から譯したものと云ふ形をとってゐる。作者はこの假裝によって自分の考へを思ふままに述べる自由を得たわけで、われわれもこれによってゲーテの宗教觀を知ることができる。その内容は煎じつめれば神と愛とはシノニムであるとの言葉につきるのである。この言葉はまたゲーテがどの樣にスピノザを讀んだかを示すものと言へよう。それからまたキリストの教へがキリスト教の教會内で受けたほどの壓迫を蒙った場所は他にないことやら、キリスト直後の司徒の時代には目に見える教會は地上になかったと云はねばならぬことが説かれてある。目に見えぬ教會を説いたこの書簡と目に見える教會への諷刺をなす「永遠のユダヤ人」とは正に表裏をなすもので、同じ年代のものとして相即する。

敍事詩では序の部分がすむと、昔ユダヤの國に靴屋が住んでゐたことを發端として彼の信仰がとり上げられる。彼は墮落した教會の時代にあって心からの信者として有名だった、即ちエッセン派、メソヂスト、ヘルンフート派、分離派を兼ね、一身にすべての宗派を負ふほどの信者だったのである。と云ふのは十字架と苦惱を重んじたからだと言ふ。エッセン派とはキリスト在世の頃、死海の畔に布教した禁欲的ユダヤ教の一派であって、洗禮者ヨハネはこれに屬してゐた。アハスヴェルスの傳説によると、彼は教會に姿を見せた時、主の名が擧げられると殊の外うやうやしく頭を垂れたと云ふのでヘルンフート派の名も出て來たのであらう。ともあれキリスト在世の時代も十八世紀のキリス

ト教諸派も入り交ってゐることから見ても傳説の敍事詩ではなく、傳説を借りた諷刺詩たることを示してゐる。「つまり彼は我獨り行く獨創的非凡の人間で、その獨創非凡のために他の多くの馬鹿ものと同じことをした」のである。

この敍事詩は全くきれぎれであるが、これを大体三つの部分に分けるならば第一の部分がアハスヴェルスに關する部分で、第二の部分は極く僅かしかないが、これはヴォルテールとフランス唯物論者に向けた諷刺と解される。即ち最も偉大な人間は人の子で、最もすぐれた頭腦も他と異る所がない。ただ人が足で歩く所を頭で歩くと云ふさかさまぶりをやるだけのこと。一般の人が尊敬するものを輕蔑し、皆が憤慨することを平氣で尊敬する。と云っても限度があるので、その極限は神を謗って塵を拜することに極まったのだ。

ともかくいろんな要素がならんでごたごたしてゐるが、アハスヴェルスの登場も第一の部分の中だけで、先きに見て來た「詩と眞實」で述べられた人物像は描かれてゐない。むしろ狂信にかたまった信者の姿であることは前に見た通りである。ブーケの觀察に從ふと、ゲーテはアハスヴェルスの姿を借りて一つの型を描かうとしたのであって、それはゲーテが始めは同情を寄せてゐたが、次第に好意あるイロニーの目で見るやうになった人間の型、即ち現在の秩序と自己自身に滿足できず、疑ひ、ほじくり、あら探しをして、果ては自己の生を亡ぼす疑問型の人間を描かうとしたものと察せられる。分離派の人たちには特にこの傾向が強く、あらゆる宗團を離れて自力で救ひを求めようとする。謂はば宗教上の偏屈者を描くつもりであったと。とまれ獨創的天才の呼び聲が高くなり、ゲーテも一時はそれに憑かれた時代風潮は幾多の危機を當時に於ける疑問型の人間として生んで來たが、ゲーテは自己の内にも周圍にもその危機とそれの生む不幸を知るにつけても、これを脱しつつこれにイロニーの目を向けたのである。それがゲーテの批判克服の仕方でもあつたわけである。後年一八一二年にゲーテは「獨創人に寄す」と題する短い詩を作った。或人曰く、われは流派を持たず、顔色うかがふ師を持たず、先人から學ぶこと更になし、と。云ふことを正しく解けば、われはこれ自家製の愚者なり、と。これはいつまで經つても絶えることなく續出する獨創狂の鼻持ちならぬ臭味に業

を煮やした結果、吐きすてたものであったらうが、先きに引用した第二の部分にも獨創奇人への諷刺はひびいてゐる。また日毎に奇蹟を求める狂信ぶりをアハスヴェルスに與へてゐる所もさうした諷刺であらうか。他方ではウェルテルを同じ頃に書いたのであるからゲーテの幅の廣さは早くから大きかったと言はねばならない。

敍事詩の第三の部分、これは分量から云へば一番長い。三千年後のキリストの再來が取扱はれてゐる。天上の場、キリストの地上再來及び地上遍歷が斷片的につらなる。天上の場はきれぎれでつながりがよくわからないが、「お前は人間愛の血をもってゐて、虐げられたものを助けるのが好きだ」とか、「父を知ったものが昔はゐたが、今は何處にゐるのだ」「みんな焚き殺されました」などの言葉が暗示としてとびとびに出て來るのはキリスト再度の受難が考へられてゐたからであらうか。それよりも心を打つのは地上に下りて來たキリストの言葉である。喜びと苦しみの鎖、欲望に戰き、脱しようと努め、一旦これを脱するとまた新たにこれにしがみつく人間の不思議な定めには安隱と神の座に休んで居れず、キリストは再び地上に下りて來たのである。人間に寄せる愛と同情がひびく。先きの日には種を蒔いた、今はとり入れに來たのである。前に惡魔が誘惑しようとした山に今キリストは下りて來て下界を見廻した。かってキリストの言葉から燃え上った光、天から下界に張りつめられた清い糸、彼の血から生れた使徒、今は何處にも見當らない。目につくものは何か、物慾が貪り、搾り、豊かに實のる野に隣人の喜びを喰ひつくし、專制君主は大理石の邸に住んで迷へる羊の民のために胸中に狼の群を孵化し、彼の氣まぐれな欲望を鎮めるためには人間の骨の髓が集められ、噯氣吐くほど有餘る中にゐて尚も幾千人の汗と血を流させ、キリストの名に於て貧しきものからその子のパンを己が滿腹の口に捧げさせてゐる。この腐った酒嚢の上に金色燦として受難の印しが光ってさながらキリストを誹り顔、と云ったのが地上の有様であった。

ここで切れて、次ぎにキリストの地上遍歷に移る。新舊いづれの教會も彼の言葉の實のりではなかったことを知ったキリストは道づれとなった牧師と共に町に入る。ここで上級牧師の家を訪れることになる。恐らくこれから具體的

な種々相に觸れることになるのであらうが、惜しいことにはこれから先きが無いのである。後になってツァーメ・クセーニエンの一つに、「教會の歴史は始めから終りまで無理と力の押通し」とある位、ゲーテは教會史を讀むほどに作り話ではない事實を數々知つたのであるから、それがこれから展開される所で止まってしまつたのは甚だ殘念である。その代り道づれの牧師を描く時に諷刺的な皮肉で味附をしてゐる。彼は不平たらたらの妻君と大勢の子供をかかへてゐるが、税金の上りが大きいので神様には天國で休んで貰って、自分はちょっぴり己が口を樂しませる、主キリストは壁の木彫のやうに頭の中にはあるが、心の中には宿ってゐないのである。キリストが上級牧師の家へ案内を賴んだ時も、こいつめ自分は豌豆まめほどもないくせに、今どなた様と一緒にゐるか知りもしないのだとむくれるが、どうせ死ぬ時には引導渡しを賴みに來るのだからと思ひ直して案内するのである。こんな風に牧師氣質が簡單ながらうまく描かれてゐる。また町に二人が近づいて、彼方に教會の塔が見えると、あそこは正義と宗教が封印してあってその威力を四方に送る所だと牧師が説明すると、キリストはかっての日の無花果の木に向ふ心地がした、とか、宗教改革は僧から家屋敷をとり上げたが、そこにまた別の僧を植付けた、今度の方がよく喋り、前のものほど顔をしかめない、などと諷刺の筆はよく動く。かと思ふと、上級牧師の家を訪れた時、出て來た女中の前掛けからキャベツが一つコロコロところがったりする所は風俗畫のやうであり、女中との問答も面白い。御主人は會議中で面會なりませぬと斷られてキリストが會議の場所は何處と聞くと、そんなことを聞いて何になりますと女中はつんとする。いやそれでも知りたいと重ねて云ふと女中はもう拒む勇氣がなくなった、「キリストは昔から女の胸への通ひ路はよく心得てゐた。」キリストの人物の取扱ひ方もさすがはゲーテである。クロップシュトクのやうに固くならない。ファウストとならんでこれが完成してをれば興味深いものとなったであらうに。但し若いゲーテの用語にはわかりにくい所があって委しい注がほしい。

☆

若き日の惱み、疾風怒濤期の天才崇拜、獨創欲の熱も若い時代の青年の苦惱の象徴と見られるし、またそれはそれだけに烈しい欲求でもあったわけであるが、同時にその病的な面を露出したことは言ふまでもない。ウェルテル病患者が多く出たことはその例證である。一七七七年の詩「冬のハルツの旅」の中にもかかる不幸な青年の姿が見出される。癒えぬ苦惱の傷手には香油も毒となり、戀の杯からは喜びではなく人間嫌ひの苦汁を飲みこみ、世の笑ひものとなっては逆に世を白眼で見る、自己を追求して滿足を得ることなく、果ては自己の力を喰ひつくしてしまふ。この不幸な青年は人に背き、唯獨り山路を踏み迷ふ、彼は人生の道に迷ひ、生きる道を見失ったのである。この時詩人は慈愛の父に向って呼びかける、汝の讃歌にして彼の耳にひびく音あらば、以て彼の心を晴らし給へ、砂漠に咽喉渇くものは身近かに泉あるも見えざれば、曇れる眼を開かしめ給へ、と。神の胸は祕密で見えずして、しかもその働きは明かに示される。見えずして顕現する愛の祕密、これこそは宗教の核心ではないだらうか。今やゲーテは孤獨の疾患から祕密にして顕現する愛の働きによる救ひに目を向けたのである。

かく宗教的體驗を深めつつあった時、これとならんでゲーテの自然觀察も進みつつあった。一七八四年に「花崗岩について」の一文がある。その中でゲーテは、人間の心と云ふ、創造物の中で最も若く、千差萬別、移ろひ易く變り易い、最も不安定なものを觀察して來た目を轉じて、最も古く、變らぬ金剛不壞の大盤石たる花崗岩に向ったことを述べて、自他共に人間の心の移り變る不安定によって數々の苦惱を經て來た後で、ゆるぎなき崇高な安定を與へられたことを感謝してゐる。安定、安心を求めてゐたゲーテが花崗岩を觀察して、ここに移ろはぬ永遠なるものを現實にあるものとして見ることができた喜び、それはこの文章を讃美の調べにまで高めたのである。これと略々近い頃のものと考へられるものに「自然」と題する讃歌風のアフォリズム集がある。ここではまだ兩極性と上昇性と云ふ概念はつかめてゐなかったのであるが、多と一、創造と破壞の兩端を含めて一なる全體をなすとの自然觀が直觀的に把へられてゐる。この文はゲーテが書いたまま忘れてしまってゐたのを一八二八年になって見せられて、これは八十年代

のものと自分で推定し、この當時に達した段階を比較級と名づけ、イタリヤ旅行を經て彼の自然觀が確立し、二つの概念を樹立し得た段階を最高級と呼んだ。比較級、最高級とは發展段階の推移であつて、質的な變化ではない。自然にとっては現在が永遠である。現在にあってしかも太初以來の存在である花崗岩は萬代不易、永遠なるものの姿であり、見えぬ永遠の現前する姿、存在に象徴の合致せるものであり、從ってそこから崇高な安定が將來し、そして安心の根據が與へられる。

他方ゲーテは人間の裡に宿る神のもの、Das Göttlicheと云ふ詩（一七八一年）では鐵の法則のもつ必然性に對して人間のもつ倫理性を强調してゐる。ここでは無差別の汎神觀に對して人間倫理が前面に出て來る。天上の神の座に近いものとして高貴な人間が求められる。自然は情を持たず、善惡無差別で永遠の鐵則に從はねばならぬ必然の環の中にあるが、獨り人間だけが不可能なことをなし得る。それは善惡の選擇をなす能力、情を知り、善根をもち、世のためにつくし、正義を實現することによって瞬間に永續を與へることができる。人間の倫理的理想像、これが高貴な人間で、それは人間となったキリストを髣髴させる。キリストはすでに「永遠のユダヤ人」の中で主役を與へられてゐるが、ここに描かれたキリストにはその後のゲーテの宗教的體驗と共に發展して來た倫理的完成の面はまだ觸れられてゐなかった。この問題は十年後の敍事詩「祕密」で取上げられたのである。兩者ともゲーテの書いた宗教敍事詩であるが、十年と云ふ年月の間の作者の思索體驗の跡は神を宿す人間、キリストの後繼ぐ高貴な人間を生ぜしめた。そして更に法燈を繼ぐものを見出し、永續、永遠の相が把へられるに到ったのである。先きの敍事詩でキリストの嘆きであったものが、今度は現に在るものとして出現し、過去または現在の諷刺から現在に永遠を與へる示顯の世界に、否定的から肯定的に移り、見えぬ教會の考へが見える集團の生活として展開されるに到ったのである。

敍事詩「祕密」は一七八四年八月に書き始められ、翌八五年の春に再び書きつづけられたが、八行詩が四十四節まで行って切れてしまった。「永遠のユダヤ人」がきれぎれの斷片の集りであったのに較べると、この方は形はととの

ってゐる。世界のすべての宗教を登場させると云ふ宗教博物館みたいなつもりであったらしいから、大がかりすぎてつづかなくなったものか。同じ年の三月、クネーベルに宛てた手紙に、「今とても大がかりな詩をせつせと書いて第四十節まで來ました。多分それはまだほんの入口にすぎないのです。この計劃は私の今の狀態ではあんまり大きすぎます。だがつづけて、どこまで進むかやってみるつもりです」とあるが、それから四節つづいただけで中絶し、再びこれに觸れることはなかった。

この敍事詩と殆んど同時に、即一七八四年八月に全集の最初に載ってゐる「獻げの歌」が書かれた。この歌は全集の序となる位置におかれてゐるが、始めは「祕密」の序とするつもりで書き出されたものである。朝露の山路を行き霧の晴れて行く日出の爽やかな感じで始まる所は「祕密」の序歌としてもふさはしいものである。レッシングは「人類の教育」（一七八〇年）を書いた時、峠の頂きに達した感を洩らしたが、今ゲーテも彼のフマニテート思想の峯に上ったのである。山を越え、谷を渡り、幾度かの危機を抜けて後、豁然と眼界が開けた感じである。「獻げの歌」では朝霧が切れてその中から女神が現はれて來る。霧の中から女體神の出現する構想はゲーテの好みで、しばしば用ひられてゐる。だからこの歌の場合でもこの女神が誰であるとか、何を示すかとか穿鑿することはシュタイガーが云ふやうに要らざることで、われわれは詩人が女神と交はす言葉に耳を傾ければよいのである。詩人は情熱が若い身内を驅けめぐった時にこれを鎭めてくれたことを女神に謝し、迷ひの日々には友づれ多かったのに、女神を識るに及んでは孤獨となってしまったことを訴へる。即ち理解されなくなって來たことの嘆きを言ったのである。女神はこれに答へて、少年の日の夢覺めきらぬ間に超人と思ひこむもののけに憑かれて、人間の義務の履行を怠ったことを擧げる。夢の幸福、夢の危機は少年の日から青年に到るまで脱し切れなかったことを言って、汝自身を知れと戒める。無限向上の努力は天才崇拜の横溢となり、それはわれ他を区別する獨創狂となって孤立の傾きを免れない。汝自らを知れとは、他と變らざることを知って、平和に世と和解せよと云ふことである。調和と云ふにほかならない。これを説く女

神には先きの日の「プロメートイス」に於けるミネルヴァの清澄な俤が浮んで來る。プロメートイス劇は斷片に終ってその後の發展はわからないが、調停役のミネルヴァの言葉には調和への暗示が讀みとられる。「獻げの歌」で女神の説く「汝自身を知れ」は「祕密」の中で述べられる自己克服と相通じるものがある。それは後で觸れよう。

一口にフマニテートと云ってもレッシング、ヘルダー、ゲーテとそれぞれに相異る面を持つのであるが、この頃に於ける共通の場をなすことは言ふまでもない。レッシングがフライマウラーの對話を書き、「賢者ナータン」を發表し、「人類の教育」で彼の思想の峯に達した頃とほぼならんでヘルダーのイデーエンは卷を追うて出かかり、ゲーテが前掲の詩を通して彼のフマニテート思想に形を與へつつあった頃と相つらなるのである。この頃はまたゲーテがシュタイン夫人、ヘルダー、クネーベルとの間の親交が篤かった時でもあった。己を理解してくれる少數の人としてこれ等の人々をゲーテは讀者として考へてゐたのであった。そしてゲーテがヘルダーの書から讀みとったものは人間の歷史を貫いて永遠に變らぬものがあると言ふ確信であった。人間の歷史は移る、宗教もまた變る。神の叡智はいつしか傳統として因襲化すれば、涸渴して人を苦しめ、人から背かれるものとなる。だが差異、變遷はあっても、どの宗教にも神の叡智は宿り、それぞれ道は異っても神への服從歸依に變りはない。どの宗教にも一度は永遠なるものの示顯した時期はあったのである。そしてこの永遠なるものはこれまた秘密にして顯現するものなのである。

敍事詩は山を越えて尋ね行く若い行脚僧マルクスと共に歩む嶮しい山路で以て始まる。だがここでは登ること久しければ自ら目指す所にも近づく信念がある。あの冬の日のハルツの山中で青年が道を見失ふ行程とは何と云ふ違ひであらうか。唯これ一つを求めるのは純粹ではあるが、阻まれると無理にもと云ふ我執が生じ易く、竟には道がなくなることにもなる。今や詩人にもゆとりが生じて來た。この詩の謎を頭の中で考へて全部を解かうとせずに、各人各様に受けとってほしいことを作者は求めるのである。美しい花も見る人次第で、樂しんで足を停める人もあれば、暗い目つきでこれを避ける人もある。好きなやうに味はへばそこに泉も湧いて出ようと云ふもの。それぞれの宗教のもつ

秘密、その諸相を通じて一つの秘密、永遠なるものの象徴を受けとるならばそれは宗教の核心に觸れたのである。一語の説明を待たずして自づと歸依安心を誘ふ象徴がここでは薇薔にかこまれた十字架である。

ゲーテはこの敍事詩を中斷してから再びこれに觸れることはしなかったが、一八一五年にケーニヒスベルクの學生團體からこの詩の説明を求められて、翌年これの回答を發表した。ゲーテはこの詩の環境としてモント・セラートを思ひ浮べることを求めた。バルセロナの近郊にある鋸山、モント・セラートには八八〇年頃ベネディクト派の修道院が建立されて、參籠する求道の士が世界各國から集って來たと云ふ。ゲーテがこの名を知ったのはアウグスト・フォン・フンボルトによるのであって、その記述の寄贈を受けたのが一八〇〇年であるから、敍事詩を書いた頃にはまだ知らなかったわけである。併しながらこれがゲーテの考へてゐた理想鄕に最も近い現實の場所であったであらうから今學生に理解させるためにはこの名を使ふのが一番の早わかりとなったであらう。

世界のあらゆる土地から勝れた人たちが集り、氣候、風土、風俗、習慣などが異るにつれ、それぞれ別個に發展して來た考へ方、感じ方をめいめいが代表し、その最高度の完成は個々では不十分であるけれども、集團生活をすることによって達成され得ることが望まれる。そして各自相互の仲介者となるべき導師が居て、その導師を中心に十二人の騎士團僧がゐて勤行につとめてゐる。十二人の騎士團僧が即ち世界の宗教を代表してゐるのである。導師の名はフマーヌスと言ふ。この名は象徴的なひびきを持ってゐる。神でもなく、キリストでもない。人間の名を持っているのである。先きの「永遠のユダヤ人」の中でキリストが町の門を入らうとして番人の役人にとがめられるところがある。名は何と申すか。人間の子ぢゃ。これでキリストはまかり通る。併し後で役人どもは大騒ぎ。何ぢゃ、あいつ奴人間の子ぢゃとぬかして、面と向って愚弄するとはけしからん。だが報告書には何と書いたものか。一杯氣嫌の隊長殿は、何を考へとる、あいつの親爺の名が人間なんぢゃ、と解決をつける。ここで諷刺としてひびく人間の名は後に「人間に宿る神のもの」の詩では高貴な人間として倫理的完成の内容を與へられた。フマーヌスはこの高貴な人間を

示すものである。敍事詩の始まりは行脚僧マルクスの到來で、その日はフマーヌスがここを立去ることを言明した直後である。

フマーヌスの生立ち素性を聞くと、聖靈の申し子として生れ、洗禮の日には一つの星が群を拔いて光り、隈が鳩の群に入って仲よくつどひ、次いで彼は少年の日に妹の腕にまきついた蛇を退治し、また彼の劍の先に觸れた岩から泉が湧いた。キリスト、ヘラクレス、モーセの傳説を一身に集めた如くである。世界のあらゆる宗教が集る所の導師と云ふ格であらうか。そして更に長じて先づ體驗したことは服從と奉仕であった。あらゆる試鍊の中で最も困難なものは自己を制することである。力は生きて働くためには絶えず前進しようとする。之に反して世の流れは四方からこれを押へ、阻み、引きさらはうとする。生けるものを拘束するあらゆる力から解放されるものは自己克服をなした人間である。服從と奉仕、あらゆる勞苦を進んで甘受して自己克服を體得して後フマーヌスは教團生活に入った。聖者、賢者、選ばれた人として彼は教團の中の仲介者であると共に神と人間との仲介者である。人間の倫理的完成がここに具現したのである。

フマーヌスの周圍の十二人はそれぞれに彼に近づき、彼に倣はうと努める。何年かの共同生活はその果實を得たのである。即ちそれぞれの特殊な宗教はその最高の成果を上げる時期に達し、それによって神の愛と人間の愛が實を結び、神と人間の德が承認されたのである。從って仲介者フマーヌスはその精神が十二人にそれぞれに具現したので、もはや地上の衣を必要としなくなり、立去ることを宣言したのである。最も困難な德たる自己克服がなされるここは世に背く修道院ではない。だからフマーヌスに受難の運命は與へられてゐない。マルクスがここに着いて十字架を見上げた時、それはあらゆる世の人の慰めとなり、希望となった十字架、精神はこれを己が義務とし、心はこれに熱い祈願を捧げた十字架、死の力を碎き、勝利の旗に畫かれてはためいた十字架が目に映じたのである。そしてこの十字架は薇薔の花で圍まれ、固い木に柔かみが與へられてゐる。この秘密の象徵には何の説明の言葉もついてゐない。一

八一六年の回答にもゲーテはこのことには觸れなかった。またこれが今後どのやうに發展するかも述べなかった。だがゲーテは言ふ、フマーヌスの退去の日とマルクスの到來の時がもし復活祭の前の週だとすれば、次に來る復活祭は人間の達した高い狀態が永續することの確證となって、一團の人々はフマーヌス退去の悲しみを大いに慰められることになるだらう、と。

してみると薇薔は復活を示すものであらうか。とまれ死の暗さではなく、明るい喜びにつつまれた十字架はそのまま永遠なるものの象徵であって、フマーヌスが地上の衣を脱ぐ時、若いマルクスが門をたたく。と云ふことは復活とは後續、後繼を意味し、地上に於ける永續、現在が即ち永遠の境が具現したと見ることができる。敍事詩の終りの所に、夜の引明け頃、炬火を持った三人の青年が登場する。炬火を消して三人の姿は見えなくなるが、これが世間へと出て行くかどうか、敍事詩はここで切れてしまったのでわからない。ゲーテの作品の中のモント・セラートと見ることができるこの敍事詩は一つの頂點であって、永遠の相を示すものであるから、謂はば原形と言へよう。但しそのメタモルフォーゼは見られぬままに切れたのである。秘密につつまれた頂點は一つの指針であって、ここにウィルヘルム・マイスターの秘密の塔となり、教育鄕となり、或はファウストに於ける共同體へと發展をなす胚芽が含まれてゐる。ゲーテのフマニテート思想の果實が傳統となり、これがどのやうな創造を今日まで生んで來たか。それは興味深いことであるが同時にあまりにも大きな課題である。

（本研究は昭和三十二年度文部省科學研究費による「古典期に於けるフマニテート概念の形成」の一部をなすものである。）